『飛ぶっきゃない』

三倉くら

神様のことを心から信じている父親と、神様のことを心から信じない母親の間で、大江那喃（ななん）は育った。

「結局は、終末の日に良い人間と悪い人間が分けられるのだよ」

父は絵本を閉じるとき、那喃にそう言い聞かせた。

次の日の夜には、「神様なんていないのだから、しっかりと勉強して立派な男性になりなさい」と言って、母は絵本を閉じた。

どうしてこれほど考え方の異なる二人が恋に落ちて自分が生まれたのか、那喃には理解できなかった。

救いは、那喃に弟も妹もいないことだった。こんなふうにこんがらがった生活を送るのは、自分一人で十分だった。

だがそんな父と母がにこにこと笑みを浮かべて、壇上で賞状を受け取る那喃を誇らしげに見上げていた。市の文芸祭で那喃が書いた小説が大賞に選ばれたのだった。

「受賞した気持ちは？」

司会者からそう聞かれたが、生来無口な那喃は固まったままだった。

「あの、嬉しいです。でも……」

天国を信じる父と現実を信じる母の笑顔が目に入ったとき、那喃は口を閉ざした。

本当に言いたいことは、言わずにいた。

同じ会場に、川端桐がいた。

人間のことを心から信じている父親と、人間のことを心から信じない母親の間で、桐は育った。

「ああ、人間って素晴らしいね」

父は涙を流して絵本を閉じた。

「人間って空っぽよ」

母は桐に絵本すら読ませなかった。

どうしてこれほど考え方の異なる二人が恋に落ち、自分が生まれたのか、桐には理解できなくて楽しかった。

「どうして自分には九人くらい兄弟や姉妹がいないのか」と一人っ子であることを残念に思った。

だからこそ、自分は書かなくてはいけない。世界はこんなにも面白いのだから。

桐が傑作だと思って文芸祭に出品した小説は、「佳作」だった。踊り子が踊りに夢中になりすぎて、砂になってしまう話だった。

一応会場に来てやったのは、大賞を取った奴の顔が見たかったからだ。

文芸祭が発行した文芸誌はすでに受賞者には配られていて、桐は

大賞作を読んでいた。
神様だとか信仰だとか、まったくもって子供じみている。「こんな作品に負けたのか」と腹わたが煮えくり返った。
「佳作、川端桐さん」
名前を呼ばれて立ち上がらなければいけないとき、悔しさと恥ずかしさで不覚にも泣きそうになった。
そして壇上にいる那喃がもじもじしているのを見たとき、「こんな奴！」と叫びそうになり、席を立って会場を去っていった。
乱暴に会場の扉を開ける桐の坊主頭を、壇上から見ていた那喃は一生涯忘れなかった。
那喃が本当に言いたかったことは、こうだった。
「うれしいです。でも、佳作の川端桐さんの作品の方が上でした」

それから那喃は中高一貫のミッション系の進学校に入ったが、高二の冬、勉強についていけなくなった。
いや、逆だ。
勉強が那喃についていけなくなった。
那喃の思考は、勉強のずっと先にあった。
それで那喃は退学し、別の高校へ入り直すことになった。
高二の冬に転校するなんて、あまりにも珍しい。しかも那喃は死んだタコのような目をしていた。那喃に話しかけるクラスメイトはいなかった。
でも、那喃はそれでよかった。
孤独は文学を研ぎ澄ませてくれる。
一人でいたかった。
だがこの学校には、文芸部があるらしい。大したことはないだろうが、「少しのぞいてやろう」という気になって、那喃は部室のドアを開けた。
髪をブルーに染めた女子が、何かを書いていた。だがノートにではなく、部室の壁一面に文字を書き綴っていた。
那喃は呆気にとられた。
彼女が振り向いて、那喃を見た。
「誰だ、おまえ」
鋭い目つきをした女の子だった。
そのとき、那喃の後ろから女の先生が現れて、「ぎゃあ！」と叫んだ。
黒ふち眼鏡のその人は、たしか現代文の玉地先生だ。文芸部の顧問なのだろう。
「なんだこれは！」
玉地先生はハンカチを取り出すと、壁に書かれた文字を拭こうと

した。だが消えない。
青い髪の女子が、「やばっ」とペンに蓋をした。
「お・お、おまえ、またやったな！　しかも、それ油性ペンじゃないの！」
玉地先生は彼女をつかまえようとしたが、その子は那喃を「ごめん！」と突き飛ばして、廊下へ飛び出した。
玉地先生が絶叫した。
「今度こそ許さんぞ、川端桐ィ！」
川端桐ーー？
那喃の中で、あの受賞式のことが一気によみがえった。
佳作を取った、あのときの子だ。
坊主頭だったから男子だと思っていたが、女子だったのか。
そして、何を壁に書いたんだ？
那喃は壁の文字を見た。
それは小説だった。
神様も人間も踊り子もゾンビも一緒くたになって交じり合い、最後にはにこやかに微笑むカーネル・サンダースの手によって油に放り込まれていた。
なんだ、これは。
びっしりと書かれた文字の前に、那喃は呆然とした。
こんな物語を、こんな暗喩を、こんなアンチテーゼを、彼女は一文字も間違えることなく、一気に書き上げたのか。
「文学は最強の学問だ」と那喃は信じている。しかし、その文学をもってしても、父が正しいのか母が正しいのか、すなわち、神が存在するのか否かを証明することはできない。だけどーー。
口がしょっぱくなって、初めて那喃は気づいた。
自分は号泣している。
とめどもなく流れる涙が口に入るほどに、那喃は泣いていた。
もし文学の神様がいるとして、その神様のそばまでは、歩いていける。そして、桐は自分よりもずっと先を走っているーー。
もちろん那喃は文芸部に入った。それから卒業までの約一年間が、那喃にとっての、所謂「青春」だった。
青春には騒動がつきものであり、そしてその騒動はいつも桐が巻き起こしていた。
桐は体育教師の背中に「ビッグブラザー」と書かれた紙を貼り付けた。
文化祭の前夜には校舎へ忍び込み、壁や廊下など、そこら中に「恥の多い生涯を送ってきました」と書き込んだ。
自分で書いた長編小説の原稿をラミネート加工したあと、裁断機でばらばらに切り刻み、図書室の本にしおりとして適当に挟み込ん

でいった。
やがて二人は進路を決める日を迎えた。
那喃は地元の大学の文学部へ進み、桐は何も決めないまま東京へ行くことになった。
その日、町では珍しく粉雪が降っていた。
桐は大量の冊子をリュックに詰め込み、行き交う生徒に「読んでねぇ」と言って配った。那喃も付き合わされ、両手に冊子を抱えていた。
それは桐が高校最後に書いた作品で、校長と教頭の悲しいＢＬ物語だった。
耽美的な表現を読んで後輩たちは目を丸くし、そして大笑いした。
配り終えないうちに、
「川端桐ィ！」
と叫んで、玉地先生が走ってきた。
この一年の間で、玉地先生の髪は処刑される前のマリー・アントワネットのように白くなっていた。
「おい、桐、まずいよ。どうする？」
桐はきょとんとした顔をしたあと、にんまり笑ってこう言った。
「飛ぶっきゃない」
桐が廊下の窓を開けた。
冷たい風が廊下に吹き込んだ。
その次の瞬間、桐は窓から飛び降りた。那喃も玉地先生も驚いて下を見た。
そこは三階だった。
ところが下に木があって、桐は枝に引っかかりながら柔らかい花壇の土に着地した。
桐が立ち上がり、雪の中を走っていった。
リュックの中から、ぼとぼとと冊子がこぼれ落ちた。
「こら、川端桐ィ！　卒業するなぁ！　わーん！」
玉地先生が声を上げて泣いた。
桐は踊るように走り去り、二度と戻らなかった。
那喃が並の男だったなら、この瞬間、恋に落ちただろう。
だが、那喃には恋愛よりも大切なものがあった。それが那喃にとっての、すべてにおける行動原理だった——文学だ。

四年が経った。
狭いアパートの一室で、何気なしにテレビを眺めていた桐は、口をあんぐりと開けていた。
それは、ある文学賞の受賞式の映像だった。
緊張した面持ちの大江那喃が、インタビュアーからの質問にしど

ろもどろで答えていた。
東京にやって来た桐は、すぐに誰かと恋に落ちた。初恋の相手は三ヶ月もせずに逃げ出したが、それでも桐はめげることなく次から次へと恋をして、笑ったり泣いたりして過ごした。
持ってきた本は全て売った。
小説なんて、書く気になれなかった。
理由は明らかだ。高校最後の一年間、大江那喃と過ごしたからだ。
桐が壁に落書きを書いている間、那喃は机に向かって書き続けていた。
そしていつも、
「これじゃだめだ」
と頭を抱え、一枚たりとも印刷しようとはしなかった。
ーーどんなものを書いているんだろう？
那喃がノートパソコンをそのままに「だめだ、だめだ」とつぶやきながら部室を出て行ったとき、桐は好奇心を抑えられず、画面を覗き込んだ。
大江那喃が書いたものはーー完璧だった。
その文体と構造は、永遠に続く回廊、天空にまで届く螺旋階段、自ら発光するステンドグラスーーつまりは、何百年の歴史にも耐えうる、完璧な建築物であった。
桐は悟った。
もし文学の神様がいるとしたのなら、文学の神様は自ら歩いてやってくる。
天から授かった才能のもとへ。
つまり、大江那喃のもとへ。
結局、私は選ばれなかった側の人間なんだ。
だから那喃が受賞したとネットニュースで知ったときも、桐は驚きもしなかった。
その頃、桐はすでに結婚して離婚して、シングルマザーになっていた。
東京には奇特な人間がいて、桐と息子のルキのことを支えてくれたが、生活はぎりぎりのカツカツだった。
「少しの愛と欲望だけで、私たちは命を押し付けられる……って書いたのは誰だっけ」
ルキが泣き止まない夜、桐はそんなことをぼんやり思った。
そんなわけだから、テレビに映る那喃を見て驚いたわけではない。
そのときちょうどルキに授乳していた桐は、記者に対する那喃の答えに、あっけに取られたのだ。
「尊敬する作家ですか？　川端桐です」
会場が静まり返った。

それはそうだ。「一体、誰？」だ。
気まずい空気が流れたあとで、質問は次へと移っていった。
桐は口を閉じることができなかった。
那喃は冗談を言うようなやつではないー特に文学に関しては。
ルキの口の動きが緩慢になってきた。
桐は床に置いてあったおしゃぶりに手を伸ばした。
この瞬間が大切だ。タイミングを間違えると、また大泣きだ。
「えい」
桐はルキの口から自分の胸を外し、すぐにおしゃぶりを差し込んだ。
「ん？」とルキは眉を顰めたが、すぐに穏やかな眠りの世界へと戻っていった。
桐は慎重に大切に、ルキのことを布団まで運び、シーツをかけた。
ルキの丸い頬にキスをした後、桐は立ち上がり、背伸びをした。
そしてローテーブルに置いてあるノートパソコンを開いた。
ワードを使うなんて何年ぶりだろう。原稿用紙設定ってどうするんだっけ。まあ、横書きで始めてもいいか。でも……何を書こう？
一行目を書き始めるときはいつも、バベルの塔のてっぺんに立っているように感じた。
足場はタイル一枚分しかなく、風が強く吹いている。
一歩でも足を踏み外せば、地面まで高速で落下し、跡形もなく粉々になってしまう。
私はもう何年も一文字も書いていない。
それに私は、空っぽだ。
「ばからし。やっぱやめよう」
桐はノートパソコンを閉じようとした。そのときだった。
「尊敬する作家ですか？　川端桐です」
那喃の言葉が頭の中で繰り返された。
ー川端桐です。
畜生、那喃の奴。文芸祭で見たときから気に食わなかったんだ。
ぼそぼそした話し方が。死んだタコのような目が。あのー光り輝く文章が。
でも、そんなあいつが言ったんだ。私の名前を。
ルキの穏やかな寝息を聞きながら、桐は大きくため息をつく。
バベルの塔に吹きつける冷たい風が、再び桐を襲ってくる。心が凍えて、泣き出したくなる。
だけどー書くっきゃない。飛ぶっきゃない。
桐は再び空中に足を踏み出した。

了